



ありあけ

佐賀大学農学部
同窓会報
No.27

発行日 2021年1月1日
編集 会報編集委員会

発行 佐賀大学農学部同窓会
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700
E-mail dousoukai@sadai.jp
ホームページ <http://sadai.jp/alumni/nougakudousoukai/>

目次

巻頭言

果樹農家を続けて38年間
JA伊万里代表理事組合長 田代 直樹 … 1

農学部情報

コロナ禍の農学部教育
副学部長 永尾 晃治 … 2
研究室紹介その⑩ 生物科学コース システム生態学分野
准教授 徳田 誠 … 3

恩師は今

農学部赤松校舎時代の思い出
渡邊 潔 先生 … 5
健康寿命を保ちながら積極的に生きる
内田 泰 先生 … 6

若手OB・OGからのメッセージ

生き方や仕事の幅を広げてくれた学生時代の
若気の至りと出会い 永田 浩史 … 7
時間を有効利用し何にでも行動や
チャレンジを！ 出 隆聖 … 7

会員の広場

上越～東北を走る自転車一人旅 古川 辰馬 … 8
エベレスト街道の話 西村希志子 … 9

支部だより

佐賀県庁支部 ……11
佐賀県教職員支部 ……11
佐賀県支部 ……12

同窓会からの連絡 ……12

編集後記 ……12

協賛広告

JAグループ佐賀 ……13
株式会社森光商店 ……13

巻頭言



果樹農家を続けて38年間

JA伊万里代表理事組合長 田代 直樹
(S57年卒 園芸・果樹)

私は、昭和53年に佐賀大学農学部園芸学科に入学、3年生から果樹教室に所属、岩政正男教授、仁藤伸昌助教授のご指導を頂き、楽しい大学生活を送りました。57年卒業と同時に就農し、伊万里梨を中心に38年間農業を続けるとともに、JA伊万里の非常勤理事として12年、今期3年間は組合長を務める事となりました。

令和2年は、新型コロナウイルスの感染拡大により、東京オリンピックの延期、緊急事態宣言発令による移動制限、経済活動の停滞、さらに、第2波、第3波のコロナウイルス拡大、高病原性鳥インフルエンザの発生と1年前には誰も予想できない年となりました。

令和3年は、コロナワクチンが開発され、以前のような人々の生活や経済活動が再開できるような年になることを祈りたいと思います。

梨農家への道

入学した53年は、共通一次試験が開始される前年で、翌年から受験科目が増えることもあり、浪人生の受験が多く、同級生の半分以上は年上でした（後に聞きましたが）。

私は、三人兄妹の長男で、幼い頃から梨農家になろうと考え、高校卒業後は農林省の果樹試験場への進学を決めていましたが、卒業記念に国立大学を受験、まぐれで合格し、高校の先生から「試験場に行ってから大学には行けん」。農家のおじさん達は「大

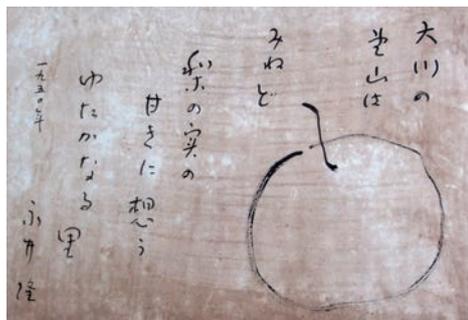
学に行ったら百姓はせんぞ」。すったもんだありましたが、佐賀大学にお世話になる事になりました。父は、自分の父が戦死したので高校に行けず中学卒業後就農したという経緯があり、私を進学させてくれたと思います。

私が梨農家を志したのは、父が大きく影響しています。父は中学3年生の卒業前の昭和50年3月に修学旅行で長崎に行き、如己堂で療養中の永井隆博士へ、地元大川町の晩三吉を持ってお見舞いをしました。NHKの連続テレビ小説「エール」で永田武の自宅を「長崎の鐘」の曲作りのために主人公が訪れた場面がありました。永田武のモデルは永井博士です。修学旅行のあと、永井博士からお礼に「大川の野山はみねど梨の実の甘きに想うゆたかなる里」の詩が書いてある色紙が送られて来ました。父はこの詩のようにおいしい梨をお客様へ届け、喜んでもらうことを目標として、梨栽培を続けました。父のカラオケの十八番は「長崎の鐘」です。

果樹教室の思い出

果樹教室では、岩政教授の研究で全国から集まった極早生みかんの果実分析をしたこと、果樹農場での実習や研究室対抗ソフトボール、先輩達との飲み方など思い出します。特に印象にあるのは、神集島合宿の時、岩政教授が4年生に「男」の作り方の講義を黒板に図まで書いて指導されました。3年生には、「まだ、教えない。」との事でしたが、こっそりと聞きました。私が3人目に息子ができたのは、岩政理論のおかげです。

卒業後は梨を中心に、みかん等も栽培、38年間で「二十世紀」梨から「幸水」「豊水」の赤梨へ変わり、



永井博士から送られた色紙

露地からトンネル栽培、ハウス栽培へと施設を導入、温州ミカンをやめてハウスきんかんに更新。今は、梨ジョイント栽培を導入、早期収穫、省力栽培を進めています。昨年より、息子も就農し4代目修行中です。

地域農業への貢献

私が組合長を務めているJA伊万里は、伊万里市と有田町にあり、梨、ぶどうなどの果物、牛肉、イチゴ、きゅうりなどが主な生産物です。

皆さんもご存じのように、農業を取り巻く環境は、農家の減少、担い手の高齢化、生産基盤の弱体化、そしてTPP・日米貿易協定などによる貿易自由化の波にさらされております。それに加え、新型コロナウイルスの感染拡大は、品目にもよりますが、佐賀牛（伊万里牛）などが大きく影響を受けています。しかし、食料は、今回のマスク不足のように外国に依存してしまうと、国民生活に大きな影響を与えます。国として、食料は安全保障上でも最も重要です。農協は安全・安心な食料の安定供給が使命です。

私は、この厳しい農業情勢の中、農業振興を通じて、少しでも地域へ貢献できるよう精一杯頑張る所存です。

農学部情報

コロナ禍の農学部教育

佐賀大学農学部 副学部長（教育担当） 永尾 晃治

コロナ禍での改組2年目

農学部は2019年度に1学科（生物資源科学科）・4コース（生物科学コース、食資源環境科学コース、生命機能科学コース、国際・地域マネジメントコース）へ改組し、今年2020年度は、2年次のコース配属が初めて行われる年でもありました。2月のコース配属説明会や希望調査、3月教授会でのコース配属決定までは無事実施されましたが、その後、新型コロナウイルス感染拡大を受けて卒業式や入学式が中止される中、新入学1年生やコース配属された2年生へのオリエンテーションの実施は、混乱の中で

進められることになってしまいました。

4月7日に入学生・在校生が多い福岡を対象に特別措置法に基づく緊急事態宣



入構口に設置された「入構禁止」の立て看板

言が発令され、4月16日には対象が佐賀県を含む全国に広げられました。佐賀大学としては、前学期開

講を予定より2週間遅らせた4月20日に設定し、その間に入学者への郵送での資料配付・連絡通知、オンラインによるオリエンテーションや講義の準備が行われ、学生の皆さんのみならず教職員全てが未曾有の事態対応に追われることになりました。

前学期開講時は、教職員以外の入構を禁止して(一時は、教職員も可能な範囲での在宅勤務及び公共交通機関利用者の時差出勤を実施)、全ての講義を遠隔授業で行うこととなりました。講義形式としては「オンデマンド型(資料配布型)」「オンデマンド型授業(授業録画型)」「同時中継型」の中からそれぞれの講義担当者が選択して実施し、当初は一部の学生さんの受講環境においてトラブルが発生した事例もありましたが、教務課の協力も得つつ随時問題を解消していくことが出来ました。

その後、7月1日以降に「新型コロナウイルス感染症拡大防止のための佐賀大学の活動制限指針」の警戒レベルが若干緩和され、「対面による講義・演習・実習・実験の原則停止」を維持しつつも、「卒業・修了年次の学生を対象とした科目等」を中心に対面実施許可が特別に下りるようになり、8月21日の前期定期試験実施(3密回避の対策をとった上で対面試験を行った科目もあり)まで無事完了しました。なお前学期講義を対象に、本学の遠隔授業に関する学生アンケートを行った結果では、授業に対する満足度などから、昨年度の対面での実施と比較して遜色のない授業を実施することができたことも報告され、安堵した次第です。

依然として予断を許さないコロナ禍

10月1日に後学期が開講し、前学期と同様の遠隔授業形式に加えて、感染防止策を徹底しながら、卒論研究・



農学部内のコミュニティスペースは閉鎖中
実習・演習などにおける対面授業形式やハイブリッド授業形式が実施(農学部で54科目、農学研究科で18科目:11月13日時点)されています。また全てではないものの学内施設利用やサークル等の課外活動も許可され、学生さんの大学生らしい生活が取り戻されつつあります。

大学教育への情報通信技術(ICT)の積極的導入はかねてから求められてきたことですが、期せずしてICT利活用をせざるを得ない状況となって見えてきたことは、都合に合わせて何度でも繰り返し講義が受けられるなどの利点が学生さんに概ね肯定的に捉えられているということです。ただしICTにも得手不得手があって、理解度の達成や教育成果のモニターをいかにして担保するかという課題が当然あります。この先、新しい教育体系を更に充実させるための試行錯誤や、コロナ禍もまだ終息には向かっていないことから、手探りな状況は今後もしばらく続くと思われます。同窓会の皆様には、今後ともご理解と益々のご支援をどうぞ宜しくお願いいたします。

研究室紹介 その⑮

生物科学コース システム生態学分野

准教授：徳田 誠

最近、SDGs(Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標)という言葉が耳にする機会が増えてきました。これは、2015年の国連サミットで採択された私たち人類が目指すべき目標のことで、産業経済活動と自然環境保全とを両立させながら、すべての人々が幸せに暮らせる社会を実現しよう、豊かで活力がある未来を目指そう、という願いが込められたものです。

この目標を達成する上で重要視されているキーワードとして、自然環境保全の観点からは「生物多様性」と、地球温暖化に代表される「気候変動」が挙げられます。

私たちの研究室では、地球上の生物多様性がどのように産み出されてきたのか、そして、どのよ

うに維持されているのかを明らかにすることを目的として研究に取り組んでいます。生物の多様な特徴はどのように進化してきたのか、それらは生き残るためにどう役立っているのか、生態系の中で生物同士はどのように関わり合っているのかなど、生物の生態や行動、進化、相互作用について、遺伝子から生態系までの幅広いレベルで研究しています。

そして、それらの基礎的な知見を活かして、地球温暖化などの気候変動や人間活動による環境変化が生物に及ぼす影響の解析、生物多様性や希少生物の保全、外来種対策や病害虫防除といった応用的な研究も行っています。

現在の研究室構成員は、教員1名、博士課程(鹿

児島連大) 4名、修士課程3名、学部生12名、特定研究員4名の合計24名です。そして、卒業生は公務員や博物館関連施設(動物園・水族館)、環境アセス、食品、農薬関連の民間企業など、様々な分野に就職しています。

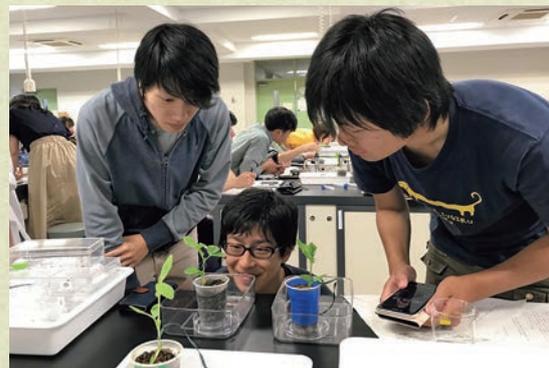
研究対象として扱っている生物は、哺乳類(アライグマ[特定外来生物]、テン、ヤマネ[天然記念物])、鳥類(カササギ[生息地が天然記念物指定]、ミヤマガラス)、魚類(アリアケスジシマドジョウ[絶滅危惧種]やモツゴなどクレークの淡水魚)、節足動物(地中性クモ類、様々な昆虫類)、植物(オオイヌタデ、オオフサモ[特定外来生物]、スゲ属、シチメンソウ[絶滅危惧種])、微生物(糸状菌、細菌、ウイルス)など、多岐にわたります。



天然記念物ヤマネの調査

とくに昆虫関連では、害虫を含む様々な種の生態解明(イチゴハマシ、オリーブアナアキゾウムシ、アメリカシロヒトリ、シジミチョウ類、ナラハバチ、タマバエ類)、寄主植物操作のメカニズムと適応的意義(フタテンチビヨコバイ、ホソヘリカメムシ、タマバエ類、ヤナギハバチ)、子育て行動の進化(ツチカメムシ類、シテムシ類)、共生微生物や植物病原ウイルスとの相互作用(アブラムシ類、ヒメトビウンカ)、天敵昆虫を用いた害虫防除(タバコカスミカメ、ナミテントウ、フジコナタマバエ)、地球温暖化が及ぼす影響の解析(アブラムシ類、タマバエ類)など、様々なテーマに取り組んでいます。

佐賀県に特徴的な生き物としては、多良山系に生息するヤマネや佐賀市の中心部をめぐらして越冬するミヤマガラスの生態、佐賀平野におけるカササギの個体数変動要因やトンボの減少要因、希少淡水魚類の繁殖生態、塩生植物シチメンソウの立ち枯れ原因の解明などに取り組んでいます。また、最近では、新種の昆虫ミズメタマバエの多



屋内実験の様子

良岳からの発見や、もっとも原始的なクモとして知られるキムラゲモ属(ヒゴキムラゲモ)の日の隈山からの確認(九州北西部では初)など、県内の生物多様性に関する新知見も得られました。

地球環境問題を解決する上で“Think globally, act locally”(地球規模で考え、地域規模で活動する)という言葉がよく使われます。私たちは、人類が抱えている様々な環境問題の解決に向けて、佐賀・有明地域の生き物を対象とした研究を通じて貢献したいと考えています。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、私たちの生活はかつてないほど大きな影響を受けました。とりわけ新入生たちは、1度もキャンパスに足を踏み入れることなくオンライン授業へと突入し、思い描いていた大学生活とはまったく異なる状況に置かれてしまいました。

こうした中で、何か私たちにできないことがないかと考え、動物園や水族館に就職している同窓生たちに協力してもらい、自宅で動物園を楽しむための動画「動物園へ行こう^^@ホーム」を作成し、動画配信サイトYouTubeの佐賀大学公式チャンネルから配信してもらいました。この活動も、地球規模での問題に対して地域規模で行動するという意味では、私たちの研究姿勢と通じるものがあったと思います。また、この活動を通じて、農学部の同窓生との絆の大切さやありがたさを改めて感じることができました。

これからも、私たちは県内のあらゆる場所をフィールドとして佐賀・有明地域の生態系や生物多様性に関して研究を進め、貴重な自然を次の世代へと受け継いでいくとともに、地球環境問題の解決や人々が幸せに暮せる社会の実現に向けて貢献していきたいと思いますので、どうか同窓生の皆様のご支援とご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願いいたします。

恩 師 は 今

農学部赤松校舎時代の思い出

渡邊 潔 先生



私は昭和31年4月、佐賀大学農学部農学専攻科(当時は1学科)の一員として九州大学農学部より赤松地区の旧成美高等女学校跡地に設立された佐賀大学農学部へ赴任。当時は、女学校跡地で木造校舎は傾き今にも倒れそうな木造2階建てであった。また、新制佐賀高等学校の女子学生も同居しており、もとも女学校であったため、男子トイレはなく、教職員は壁に向かって用を足していた有様であった。また、教官の部屋は昔の講義室であり、部屋は一人ずつ割り当てられたものの広すぎて暖房としては火鉢一箇のみで、床は隙間だらけで雑草が伸びてくる始末。学生も下駄履きが多く、きしむ廊下を歩くので音が響き、おまけに戦争のため天井板は剥がされていて鳩の住み処となってクークーと鳴き声がし、本当に(のどかな)廃屋であった。農業土木学科となって実験室の拡張が必要となり、丁度校舎の玄関口にあった用務員室を貫うことになり畳敷きの居間と土間を学生と共に改造することにし、土間にはコンクリートを打ち、実験台は大きな炊飯用の竈があったので、これを土台として、上に板を張り天秤台として土質実験をすることにし、畳部屋は残し、学生のたまり場として活用した。設備充実費が配分されることになり、この実験室に最新型の土質試験器が並ぶことになったが、当時の西学長が見学に見え建物と試験器の格差に驚かれたのを覚えている。畳付きの実験室は学生のたまり場となり、将棋や囲碁をしたり、部屋の中から横を流れる多布施川でハヤを釣ったり、川に籠を仕掛けて蟹を捕ったりして楽しんでた。幸い街にも近く、自由に勉学と趣味を享受していた。次第に古い建物も整備され、傾いた2階建て校舎も支柱で補強され正常になって少しずつ大学(?)らしくなってきた。一方、校内の圃場は建物撤去と共に、現在佐賀テレビの敷地となっている所に農場から大量の土砂が投入され、圃場らしくなってきたが、肥料不足のため土砂に枝豆を植えて、それをすき込むので実(み)は自由にとっても良いとのことだった。熟した枝豆の実を取って茹でて学

生たちと腹一杯実験室の畳の上で飯の代わりに食した思い出が残っている。

当時植物保護学の水上教官はテニスの達人で学会出張の折には、必ずラケットを持参するほどの人だった。校内にテニスコートを作ることにし、賛成者多数で決定し教職員・学生と共に汗を流して完成したが、土を固めるローラーは土管にコンクリートを投げ込んで作ったので重たくて使用に耐えず、またコートの向きも校舎の都合で東西向きにしたので太陽がまぶしく、朝夕は使用不能であった。この時、コートは南北向きに作るものだと知った。また、環境整備として校内にワシントンヤシやデイゴの背丈1メートルぐらいのものを植栽したが、今では本庄キャンパスに移植され、農学部正門付近で立派な並木となっているのには驚きである。

入学試験は農学部の講義室で行われていたが、2日目には受験生の欠席が目立つようになり不思議に思っていたが、実はオンボロ校舎を見て高校より施設が貧弱で、これが大学か?とがっかりして去ったらしいことも後で分かり、早く大学の環境整備が行われることを切望した。また、ある受験生は始めから入学を見限ったのか、受験中の昼休みに公園のボートに乗り転覆して、びしょ濡れとなって職員がアイロンを掛けて励ましたことがあったが、人の情を感じたのか学生は無事入学したそうで、万々歳であった。

赤松時代は、終戦後の学制改革で旧制高校や高専、師範学校が合併して新制大学となったので、旧制大学とは雲泥の差があった。しかし、そのどん底から抜け出して着々と成長した裏には、これを支えてくれた国、県、市、卒業生や同窓会の皆さんの援助ま



た、教職員の皆さんの努力のおかげで、今日の佐賀大学があることを肝に銘じて感謝の念でいっぱいである。

幸い、私も93歳にして未だ元気で、趣味の絵などを描いて余生を楽しんでいる。久しぶりに佐賀大学農学部のことを書くにあたり、古き良き時代の佐賀

大学農学部を思い出し、既に他界された物故者の先生方、そして、卒業生の皆さんに敬意と感謝を捧げると共に今後の母校の発展を祈念する次第である。

(補足) 渡邊先生は退官後に絵を始められ、各展覧会で受賞多数、昨年は県展にも入選されています。

健康寿命を保ちながら積極的に生きる

内田 泰 先生



佐賀大学農学部時代

私が農芸化学科食品製造学教室に助教授として赴任したのは、昭和42年6月23日と記憶している。この日は筑紫野寮に起因した第1次学生処分が発表され、116日間に及ぶストライキが続行された分岐点であった。それから約36年後、平成16年3月31日定年退官の日を迎えたが、この日も国立大学最後の日であり、4月1日からは大学は法人化され、組織、人事や予算面でもかなり異なった大学となった。とにかく出発は学生運動の洗礼を受けたが、農学部での36年間、向学心旺盛な学生に恵まれ、自由な教育と研究ができたことは、何事にも付度が蔓延している今の時代から考えると大変幸せであった。

佐賀短期大学時代

佐賀大学を定年後の6年間は、第二の人生として佐賀短期大学に勤め、水溶性ケイ酸に出会った。ケイ素 (Si) は原子番号14の非金属元素で、自然界では不溶性のケイ酸 (SiO₂) として存在している。水溶性ケイ酸は白雲母を熱融解してでき、作物の発育を促進し、害虫、気候、病気などに対して抵抗性を与え収量も高める作用がある。佐大ではキトサナーゼやキトサンの抗菌性など基礎的な研究が主流で、応用面の貢献をする機会が少なかった。退官後はその反省から「キトサンと水溶性ケイ酸の農業分野への利用」について現代農業にも寄稿し、さらに時々ミニ講演会を開き、イチゴ農家の人々を訪ね現在も啓発活動を続けている。

将棋とテニスを中心とした第三の人生

平成22年71歳になり短大を退職し、将棋とテニスを生活の中心にした第三の人生を送っている。

NHK Eテレの将棋講座を4年間聴講し課題を提出し、平成26年日本将棋連盟よりアマ3段の称号を与えられた。この機会に赤松公民館で週1回小学生を対象に将棋教室を開き、まさに藤井聡太ブームで30~40人の生徒が集まった。この間、赤松小学校の3人は佐賀県小学校将棋団体戦に3年間連続優勝し、大阪での全国大会にも出場した。テニスは毎週2回朝9時から2時間、本庄コートで佐大OBの教官・事務職員約12人と楽しみ、健康を維持している。



82歳の現在

令和2年は新型コロナウイルスの蔓延で生活が一変した。大学院時代DNA型家蚕多角的ウイルスの起源・生成・誘発について研究していたので、50数年前学んだことがコロナ禍の現在役に立っている。文系出身の友人たちにウイルスの基礎やPCRの原理、コロナウイルスの新しい情報などをメールで送信していることも日課の一つである。最近は旅行制限、外出自粛などで家庭菜園や読書をする自由な時間も多くとれ、退職して以来最も充実した1年ともいえる。ともあれ現在82歳、あと数年は健康寿命を保ちながら、積極的に生活を送りたいと考えている。最後に農学部同窓会の益々の発展を祈念してペンを置く。

若手OB・OGからのメッセージ

生き方や仕事の幅を広げてくれた 学生時代の若気の至りと出会い

ヤンマーホールディングス株式会社 技術本部
中央研究所バイオイノベーションセンター
アグリテックグループ グループリーダー

永田 浩史

(H17年院修了 農学研究科 生物生産学)



私が佐賀大学へ入学したのは1998年。もはや若手OBのメッセージとは言い難いですが、中年になり学生時代を振り返って、思うことについて書き連ねます。

1998年、私が入学した頃は失われた20年の真っただ中、インターネットが本格的に普及し始めた時代で、起業したてのOPTiM菅谷社長も同じ農学部の講義を受講されていたのを記憶しております。小さな地方国立大学出身者の卒業後の就職は一気に不安定になり、大学生活をいかに過ごすかで、その後の人生が大きく左右される時代でした。

私はグローバル化の時代を生き抜くためには、国境を超えた人達とのコミュニケーション能力が必須と考え、その価値観を共有できる仲間を集め、国際交流がテーマのサークルを組織しました。留学生と多数のイベントを企画、実行し、その繋がりや、数々のボランティア活動にも従事しました。研究室では、内田進教授の指導の下で麦の品質検査を実行しJAへ報告しました。また、タイ国カセサート大学へ国費交換留学も経験させて頂きました。

自分にとって興味のあること、新しいこと、将来に役に立つと思うことに、時間を惜しまず心血を注ぎ、大いに様々な人との出会いを楽しみました。時折、若気の至りにより、人に迷惑を掛けることもありましたが、この時の仲間は今もLINEグループで繋がっており、日々、思いや現状を分かち合い、率

直に意見を言い合い、刺激しあっています。一生の大切な仲間です。

その後、超就職氷河期の時代に技術職で就職しましたが、営業へ配属となり、入社3年目に自身の希望した海外へ駐在しました。しかし、リーマンショックにより2年で日本へ戻され、突如10億もする大型プラントの工事現場監督として修羅場へ放り込まれ、その後、自社の新研究拠点の建設をする為に、土地から探索し、拠点の建設、部署の立ち上げ、現在は、研究のマネジメント、労務管理、設備の管理業務等に携わっております。このような表現をするとブラック企業？と言われそうですが、そんなことはなく、周囲に相談し、助けてもらっています。



バイオイノベーションセンター倉敷ラボ

常に様々な新しいことに挑戦し続けることで、新たな出会いがあり、学び、人生が豊かになると思っています。Challengeしても、ストレスを抱え込まずに対峙できております。素直にそう思えるのは佐賀で出会った人達から学んだからです。今、感謝の気持ちで一杯です。

最後に、学生の皆様へ。大きな失敗の経験はありますか？佐賀の人は挑戦する人を応援する人が多いと思います。甘えてもよかとやなかですか？きっとOBの皆さんもそがん思つとると思いますよ。

時間を有効利用し何にでも 行動やチャレンジを!

伊万里信用金庫 出 隆聖

(H29年院修了 農学研究科 地域ビジネス開発学)

私は、佐賀大学農学研究科地域ビジネス開発学研究室に所属していました。現在は、佐賀県の伊万里信用金庫という金融機関に勤めています。入社した

経緯は、研究や農業版MOT教育の中で勉強していくうちに、農業を金融の面でサポートしたい気持ちになり、また、当金庫が農業に力を入れ、金融以外の様々な面でサポートしていく方針とのことで、共感をし入社を決めました。

現在は、融資と預金をメインに外回りを担当し、



伊万里の商店街や駅周辺を訪問しています。また、日々の業務のほか、農業・漁業分野のお客さまも担当させていただいており、大学で学んだことを活かしつつ、補助金を活用した商品開発や商談会などにも関わらせていただいています。最近は、ふぐの養殖をされているお客さまで、「傷が入ったふぐ（ロスになるもの）」の補助金を活用した新商品開発に携わらせていただいております。ロスを減らすための経営のやり方、ロスを出した際の付加価値をつけた商品開発に取り組んでいます。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、多くの企業や農業分野など様々な方が厳しい状況に陥っており、融資業務が非常に忙しい時期もありました。スピーディーな対応をすることでお客さまから感謝の言葉も頂くこともあります。融資をする以外にも、経営のコンサルティングなどの支援をする場合もあり、お客さまと一緒に今後の展開について考えています。

後輩へのアドバイスとしては、私は入社当初は金融の知識が余り無い状態でしたので、限られた時間の中で勉強や情報収集をし、今も継続をしています。学生時代は社会人と比べ時間に少し余裕があると思いますので、時間を有効活用し、何にでも行動やチャレンジをして欲しいと思います。将来を考えると、何をしなければならないではなく、まず何をしたいかを考え、



それに向けての準備期間として学生生活を有効活用していただきたいです。私は農業版MOT

を受講することで農家や金融機関の方と触れ合う中で色々な視点を持つことができ、自分の可能性が広がったと感じています。

会員のた場

上越～東北を走る自転車一人旅

2020年9月から10月にかけて群馬県高崎市をスタート、秋田市をゴールとする7泊8日の自転車旅に出かけた。天候にも恵まれ、無事に走り終えることができた。

私は、10年前、広島で行われた佐大農40年卒同窓会へ自転車で参加したことが契機となり、その魅力に取り憑かれ、その後、毎年1回、1～2週間程度、



図1 旅のコース

自転車で全国を旅してきた。その結果、昨年までに全国44都道府県をカバーするに至った。今年5月に、残り3県を走り終える計画だったが、コロナウイルスの感染が心配で実行を見合わせてきた。この旅を決断するに当たっては葛藤もあったが、

古川 辰馬 (S40年卒 農学・育種)

彼岸を過ぎた頃から、新たな感染者の発生が少なくなったこと、東北地方、特に山間部の気候がこれから段々厳しくなっていくこと、更に来春以降に先延ばしした時、本当に実行できるかどうか分からない歳（来年78歳）になっていることを考え、ギリギリのタイミングで決行した。

初日は20kmほど利根川自転車道を走った。休日とあって多くの人々が散歩、ジョギング、サイクリングを楽しんでいた。その休憩所で、一人のサイクリストに出会った。高崎市に住む59歳の男性で、週末はよくこのコースを走ると言う。コロナ禍の中、出会いは極力控えてきたが、あえて声をかけたのは翌日の三国峠越えに関する情報が欲しかったから。彼は遠来の老人（私）が一人で峠越えすると聞き、心配だったのか、いろいろ助言してくれた。峠近くは天候が変わり易い、トンネルは長くて狭いから要注意等、一度別れた後も、後方から追って来て、併走しながら、サイクル体験などで歓談した。左右に赤城山、榛名山を眺めながら走った。

旅の2日目は最大の難所、三国峠が待ち構えていた。国道17号（三国街道）は関東と越後を結ぶ交通路として古くから利用され、江戸時代は越後各藩の参勤交代に利用されたという。17号の最高地点が三



写真1 標高1,085mの三国峠トンネル

国峠で標高1,085m(写真1)、前日の宿泊地、沼田市との標高差669mを登り切るのに約4時間を要した。途中、「三国峠10km先」という標識を見ては、ずいぶん近づいたぞ、と安心し、「標高900m」の標識にはトンネルはすぐ近くだ、と元気づけられた。この日は長短あわせ10カ所くらいのトンネルを通ったが、そのいずれも60年位前に作られたものであり、歩道もない。前照灯を点灯し、尾灯を点滅させながら緊張して走った。トンネルのいくつかは工事中で、片側の交互通行が行われていた。自転車は最後尾を走るように指示され、走り出すと、後方を「最後尾車」という標示をつけた工事関係車両がフォローする、前方の車は、たちまち走り去るし、後方からは最後尾車が追いかけてくる。向こうの入り口で待機する車を待たせては申し訳ないとスピードを上げるも、軽い上り坂のため出口の光がなかなか見えてこない、加えてトンネル内は薄暗く路面も良くない、向こう側で待っていたドライバーはさぞイライラしたことであろう。この旅で唯一、少し怖い思いをした。

ゴールの秋田までの道のりは遠かった。2日目の宿泊地、南魚沼市では、有名な南魚沼産コシヒカリを食べたいばかりに、少々高い夕食付きのホテルに泊まった。3日目、燕市は刃物、金物で有名、宿の近くの産業資料館で高級な刃物類を見学し、記念に手頃な大根おろし器を買った。4日目、日本海に沈む夕日が売りの村上温泉では、温泉で疲れを癒やし

エベレスト街道の話

2020年5月、コロナ禍でロックダウンが行われていたネパールの友人から、カトマンズからエベレストが見えたという写真が送られてきた。カトマンズは今だに未舗装の道路が多く、その土埃と車の排気ガスによる大気汚染のため眺望が悪く、コロナ以前から日常的にマスクを着用している人が多い。今年はロックダウンによる経済活動の低下で大気が綺麗になり、カトマンズから約200km離れたその姿を見ることができたという(写真1)。

た後、部屋から美しい夕日を眺めた。それにしても新潟県は広い、この県を通り抜けるのに丸3日かかった。5日目の山形県酒田市は、この日の走行距離が100kmを超え、疲れて市内見学が出来ず心残りだった。6日目、ついに山形県境を越え秋田に入った。47県目である。鳥海山を右に日本海を左に見てゴールの秋田駅前を目指した。

秋田駅に着いたら記念写真を撮るべく「47県走破」と記した紙を準備してきていた(写真2)。近くにいた高校生に頼んでシャッターを押してもらった。彼の仲間も私の持つ紙を見、一様に「スゴイ!」、「写真撮っていいですかー」ときた。今時の高校生は全員スマートフォンを持っている。しばらくの間、彼等の前でポーズをとらされた。



写真2 秋田駅前にゴール

サイクリングを始めたきっかけは、今から40年以上も前、私の伯父が81歳の高齢で単独日本一周の自転車旅に挑戦したことに遡る。81歳での挑戦は当時でもめずらしく、佐賀新聞で紹介され、行く先々で地元紙にも紹介された。これに触発され、退職後始めたサイクリングは、全国47県を走破するまでに広がり、今や私の生活の一部となっている。歳を重ねるにつれ、健康を強く意識するようになった。バランスのとれた食事、毎日の運動、年1回の定期検診は、今や次の自転車旅への準備として欠かせなくなった。足腰が動く間はしっかり準備し、伯父の偉業に少しでも近づきたいと思っている。

西村 希志子 (S52年卒 農学・植物病理)

ヒマラヤは雨期が終わった10月中旬から2か月ほどが、空気が澄み晴れ渡る空に山並みが美しいトレッキングシーズンで、エベレスト街道には世界中からトレッカーが訪れる。私もエベレストを間近に見たくて、この街道を2009年と2018年の2度歩いた。

エベレスト街道の出発地ルクラ2,800mはカトマンズから双発プロペラ機で約40分。ルクラの空港名テンジン・ヒラリーはエベレストに初登頂し空港建設に尽力した二人の名前に由来している。余談であ

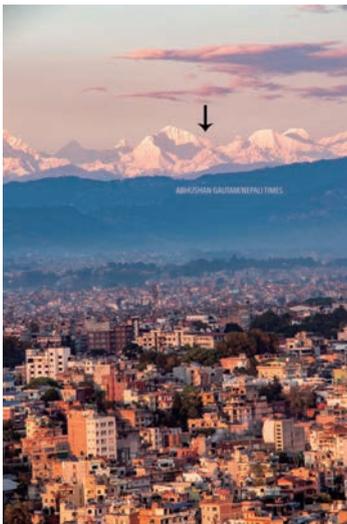


写真1 Nepal Times電子版
5月15日付より転載

るが、この空港は山の緩斜面に建設され、滑走路の全長527mと短く北側は丘に面し南側は600mほどの切り立った崖、さらに11.7%の上り勾配が付いており、世界で最も高度な操縦技術が必要と言われている。飛行機の離発着を見ているとその操縦技術に感動を覚えるほどである。

ルクラからエベレスト街道終点のカラパタールまでは高度順応のための停滞日を入れて往路10日復路5日約60kmの道のり。歩き始めて2日目のナムチェ 3,440mはシェルパ族最大の町で、急斜面に展開している（写真2）。



写真2 富士山とほぼ同じ標高の町ナムチェ

ナムチェの少し手前の木々の合い間に、エベレストビューポイントがある。ずっと森の中を歩くので、ここで初めてエベレストを眺めることができるが、この先またしばらくはその姿は見られない。

ナムチェの気圧は670hpa程度で、頭痛や吐き気などの高山病の症状が出てくる人もいて、高度順応のため連泊滞在する。高山病予防のために処方薬のダイアモックスを服用するが、利尿作用でカリウムが排出され指先に痺れが起こることがあるので、フルーツジュースを持参した。

ナムチェの町を登りきったシャンボチェの丘3,880mにあるのが、エベレストビューホテルである。この辺りで再びエベレストに対面できる。ホテルの建設者は日本人の宮原巍(たかし)氏。建設から竣工にいたるまでは大変なご苦労があったと思うが、ホテルのテラスからの眺望はまさに絵画であった(写真3)。



写真3 ホテルからの眺望 奥左がエベレスト
左から3番目が筆者

ホテルから先はエベレストを正面に見据えながらのトレッキングとなる。途中、寺院の村タンボチェ 3,860m・高度順応のため停滞したディンボテ 4,410mを通過するが、4,000mを越えると、さすがに息が切れやすくなる。さらに歩を進め、ルクラを出発して9日目にゴラクシェプ5,170mに到着である。

ゴラクシェプから約3時間ほどでエベレストベースキャンプEBCだが、10月以降は頂上にアタックする隊は少なく、私が訪れた時はテントは皆無であった。EBCからエベレストの頂上は見えない。

そして翌日、エベレストの絶景ビューポイントであるカラパタール5,545mに登る。カラパタールはゴラクシェプにある山で、約400mの登りがとにかく辛く、酸素の薄さを痛感した。この時の気圧は540hpa。やっとたどり着いたカラパタールからの眺望は壮大の一言に尽き、空は宇宙の蒼色であった(写真4)。エベレスト山頂8,848mはここからさらに3,000m以上も上にそびえているのである。この場にいることがとにかく嬉しくて、離れがたい思いがする場所であった。

(文中地名に付した標高は、資料によっては異なっていることがある。また、日程は筆者の二度の経験による。)



写真4 カラパタールから望むエベレスト

支部だより

佐賀県庁支部

11月6日に佐賀市内において、佐賀大学農学部同窓会県庁支部の新旧役員会を行いました。今年度は新型コロナウイルス感染防止の観点から、令和2年度県庁支部通常総会を书面決議で行ったため、新役員は初顔合わせになりました。

なお、総会については初めての书面決議でしたが、過半数の承認により無事可決しました。

新しい支部長以下の役員については、次のとおりに選出されました。支部長：鍵山勝一（S61）、副支部長：中島寿亀（S62）、川路勝（H3）、幹事長：信原浩二（H2）、会計：荘山敦史（H8）、幹事：原田健太郎（H29）、柿本望（H26）、松本茜（H29）、岩城雄飛（H19）、井上晶子（H6）、御領原雄太（H26）、監事：多々良泉（H3）、土井正治（H2）【敬称省略】（ ）は卒業年次

本年度の会員は、中野里那、亀川正義、田中英晶、

丸田沙織、山崎晃世、久保夏紀、米倉翔太、本多優志、長尾千尋、大串覚【敬称略】の10名が新たに会員になり、現在の会員数は247名となりました。

新たに入会された会員を総会で紹介できなかったため、来年3月に開催している「先輩を送る会」で紹介すべく準備を進めていきます。あとは新型コロナウイルスの脅威が去り、「先輩を送る会」が無事開催できることを祈るばかりです。



八田 聡（S63年卒 園芸・果樹）

佐賀県教職員支部

佐賀県教職員支部では毎年12月に支部総会を開催しています。しかしながら本年度は、新型コロナウイルス感染防止の観点から総会を书面による決議としました。

議事の事業報告は、農学部同窓会事業への教職員支部役員の参加状況。会報「ありあけ」に寄稿した教職員の紹介。決算報告は、令和元年度の支部総会時の懇親会をはじめとした事業に係る収支決算の報告。支部役員については、昨年度の支部総会で承認された役員が2年任期であるため、令和3年度までは継続されることを報告しました。この他、会費納入の依頼を支部長が個別に行うことを確認したところです。

このように本年度は书面決議としたことから、支部総会終了後に毎年開催している農学部同窓会の役員の皆様をお迎えしての懇親会も残念ながら開催できませんでした。

新型コロナウイルスにより私が勤務する学校でも卒業式、入学式、体育祭への入場者制限、文化祭の中止など学校行事の縮小を余儀なくされています。また、就職試験も例年より1カ月遅らせての開始となりました。

例年であれば就職内定がほぼ出そろい11月に入っても2次面接が行われるなど生徒も職員も慌ただしい日々となっています。加えて、佐賀県内のほとんどの県立高校が12月と1月にスキー修学旅行を計画していますが、11月に入りコロナ感染者の増加が続いているため予定通りの実施が危ぶまれるなど学校運営への影響はまだまだ続いています。

文部科学省からは、新生活様式による学校生活や学習用パソコンを活用したりリモート授業への対応が求められています。教職員も遠隔授業の研修会を受講するなどリモート授業の準備を行っているところです。

教職員支部では、早く新型コロナウイルス感染が収束して生徒の活発な活動が再開できることを願っています。

佐賀県教職員支部 令和2、3年度役員

| | | | |
|------|-------|-------|---------|
| 支部長 | 大坪 正幸 | 昭和59年 | 農学科卒業 |
| 副支部長 | 外戸口良文 | 昭和61年 | 農業土木科卒業 |
| 副支部長 | 江島 博文 | 昭和62年 | 農芸化学科卒業 |
| 幹事長 | 三原 聖子 | 昭和63年 | 農芸化学科卒業 |

大坪 正幸（S59年卒 農学・農経）

佐賀県支部

佐賀県支部は、県内在住で農学部同窓会のいずれの支部にも属さない方々をもって、平成20年2月に発足し12年を経過しました。令和2年10月現在の会員数は115名となっています。

令和2年度総会を5月8日（金）に「グランデはがくれ」（佐賀市）で開催する計画でありました。しかしながら、新型コロナウイルスが感染拡大する状況下、役員会で検討し、今回は、会員の皆様の安全を最優先に考え、一堂に会することを中止し、総会資料を配布することでご了解をいただきました。

会員の皆様には、学生時代の思い出などを肴に盃を交わすことを楽しみにされていたのではと思います。

今総会の役員改選で、新支部長に福島末行氏（S50年・果樹）、副支部長に服部二郎氏（S50年・土改）、幹事長に森田昭（S52年・農経）、幹事に山口郁雄

氏（S52年・農経）、溝口善紀氏（S53年・植病）、熊谷正司氏（S53年・土改）、監事に前支部長の山口俊治氏（S49年・土改）、そして、顧問として、高木胖氏（S36年・育種）、田中欽二氏（S39年・植保）、澤野兵五氏（S44年・育種）が選出されました。



福島末行新支部長

新型コロナウイルスの感染が収まり、一堂に会することができることを期待し、令和3年度の総会を5月7日（金）に「グランデはがくれ」で開催することで予定しております。皆様方と会えることを楽しみにしています。

森田 昭（S52年卒 農学・農経）

農学部卒業生の皆様へ 会費納入のお願いとお知らせ

日ごろより、会員の皆様には同窓会活動に対して御理解と御支援をいただき、厚くお礼申し上げます。

①会費納入について

同窓会では、会報「ありあけ」の発行、総会の開催、大学との意見交換会、在学生への就職支援などの活動を行っていますが、これらの運営費は皆様から納入いただいた会費で賄われています。

同窓会の活動趣旨に御賛同いただき、会費納入に御協力をお願いいたします。

②農学部同窓会名簿の更新について

同窓会では、会員名簿の整理・更新に取り組んでおり、令和3年度に全会員を対象とした、住所や勤務先等に関する一斉調査を計画しています。

活動に御賛同いただき、調査への御協力をお願いいたします。

なお、令和3年4月を目標に、会費払込取扱票と名簿用動向調査票の皆様への送付を計画しています。お手元に届きましたら、お手数ですが、是非御協力をお願いいたします。

編集後記

●令和3年、あけましておめでとうございます。今号から内海修一さんに代わり編集を担当することになりました松尾です。会報の編集は初めての経験であり内心心配をしましたが、皆様の協力で無事No.27を発行することができました。

●ところで、昨年は新型コロナウイルスの感染拡大で、社会に不安感が広がり、経済的にも大きな打撃を受けた年でした。そのような状況の中で同窓会活動も、総会の中止をはじめ、計画されていた行事の延期、実施方法の変更など大きな影響を受けました。

●編集担当者としては、会報に掲載を予定していた行事がことごとく中止や延期になったことから、ページを埋めることができないのではと不安を感じていましたが、私の心中を察してか執筆者の皆様の協力でページオーバーとなり、嬉しい悲鳴を上げたところでした。

●さて、今号は、「コロナ禍の中、大学はどうしているのだろうか？」との心配の声があったことから、永尾副学部長にコロナ禍における農学部の状況を紹介していただきました。また、今号から、「恩師は今」というテーマで、退官された先生に現在や当時のことを語っていただくこととして、今回は渡邊潔先生と内田泰先生に執筆していただきました。さらには、昨年6月にJA伊万里の組合長となられた田代直樹さんには巻頭言を、他にも多くの方にお忙しい中玉稿を執筆いただきました。ありがとうございました。

●会員の皆様には、今後とも農学部同窓会報「ありあけ」のさらなる充実・発展に向けて御協力・御支援をよろしくをお願いいたします。

編集担当：松尾 孝則（S52年卒 園芸・植物病理）

協賛広告

この度の同窓会報発刊に際しまして、新型コロナウイルス感染拡大の厳しい状況の中、協賛広告をお寄せいただき誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げますとともに、協賛各社の益々の御発展をお祈り申し上げます。

JAグループ佐賀 消費拡大運動実施中!

食べよう! 飲もう! 飾ろう!



耕そう、大地と地域の未来。



JAグループ佐賀

JA佐賀中央会/佐賀市栄町3番32号 TEL.0952-25-5115

JAグループ佐賀

検索



MORIMITSU

Grain & Pet Care Communication

株式会社 森光商店

〒841-8611 佐賀県鳥栖市藤木町字若桜9-7

PHONE.0942-85-1125(代) FAX.0942-83-8868

ホームページ <http://www.morimitsu.co.jp>